

B. 落語「猫の皿」を読みましょう。

- 1 落語は今から三百年以上前の江戸時代*に始まりました。この時代に
たくさんの方の前でおもしろい話をして、お金をもらう人がいました。
このおもしろい話を落語と言い、落語をする人を落語家と言います。落
語家は一人でいろいろな声や身ぶりを使って、おもしろい話をします。
- 5 今でも落語はとても人気があります。

江戸時代の落語の一つ、「猫の皿」を読んでみましょう。

ある所に一人の男がいました。男はいなかに行って、古い物を安く買
い、江戸*でそれを高い値段で売っていました。

- ある日、男は川のそばにある茶店に入りました。男は茶店でお茶を飲
みながら、外を見ていました。その時、猫が歩いてきて、えきが入った
皿の前で止まりました。男はびっくりしました。その皿はとてもめずら
しい物で、一枚三百両*もする皿だったのです。
- 10

男は思いました。

- 「きっと茶店の主人はあの皿がいくらか知らないんだ。だからあんな
に高い物を猫の皿に使っているんだ。そうだ！主人をだまして、あの
皿をいただくよう！」
- 15

男は猫を抱き、にこにこしながら主人に言いました。

「かわいい猫だね。私は猫が大好きなんだ。前に猫を飼っていたけど、
どこかに行っちゃって……。ご主人、この猫くれないか。」

- 「無理でございます。この猫は私の家族みたいで、とてもかわいいん
です。」と主人は言いました。
- 20

「じゃあ、三両払うから、どうだ？」

三両というお金はとても大きいお金です。

- 「わかりました。猫をさしあげましょう。」茶店の主人はうれしそうに
言いました。
- 25

「やった！」

男は心の中で笑いました。そして主人に三両払って、言いました。

「この猫の皿もいっしょに持って行くよ。」

「それはさしあげられません。」主人は言いました。

30 「どうして。こんなきたない皿。いいだろう。」

男は何度も頼みましたが、主人は絶対に皿を渡しませんでした。

男はがっかりしました。その時、猫が男をひっかきました。

「痛い！何だ、この猫！こんな猫、いらぬよ！」

皿はもらえないし、猫はひっかくし、最悪です。男は主人に聞いて

35 みました。

「どうしてその皿を渡したくないんだ。」

「これはとてもめずらしい皿で、一枚三百両もいたします。家に置いておくとおぶないので、こちらに持ってきているんです。」

主人は話を続けました。

40 「それに、ここに皿を置いておくど、ときどき猫が三両で売れるんですよ。」

●江戸時代（えどじだい）

Edo period (1603-1867)

●江戸（えど）

former name of Tokyo

●両（りょう）

a unit of currency used in the Edo period
(1両=75,000円ぐらい)

C. 質問に答えてください。

1. 男はどんな仕事をしていましたか。
2. 茶店にあった皿の値段はいくらでしたか。
3. どうして男は猫をほしがったのですか。
4. 男はいくらで猫を買いましたか。
5. 男は皿を持って帰りましたか。
6. どうして主人は皿を茶店に置いておくのですか。
7. 茶店の主人と、男と、どちらがかしこい (clever) ですか。

兄は本当ほんとうにりっぱな人なんです。両親りょうしんが死んでから、兄が働きながら、私わたしを育ててくれました。私を大学に行かせてくれたのも兄です。卒業そつぎょうして、兄といっしょに働いて会社を大きくしてきました。今、兄は社長ですが、みんなに尊敬そんけいされています。部下ぶかには親切むりざんぎょうで、無理な残業はさせませんし、冗談じょうだんを言って、社員わらを笑わせるのも兄です。ですから、みんなは楽しく、よく働いています。

家庭でも、兄はいい夫おっとだったと思います。兄は妻の富子つまさんを自由とみこにさせていました。でも、富子さんはわがままな人でした。結婚けっこんしたばかりのころは、富子さんも銀行の仕事を続けたがっていたので、兄もそうさせていました。でも、すぐに仕事が忙しくて、家事ができないから家政婦がほしいと言いました。富子さんが仕事をやめても家政婦を使っていました。そうじもせんたくも料理も家政婦にさせていました。それで、自分は、毎日テニススクールに行ったり、友だちと買い物をしたりしていました。兄が忙しく働いている時間にですよ。

あの晩ばん、私は見たんです。兄にたのまれて、書類しよるいをとり、兄の家に行ったとき、富子さんが恋人こいびとを部屋へやに呼んで、お酒さけを飲みながら、楽しくすごしているのを。私は頭にきて、富子さんに言ったんです。「どうして兄と結婚したのか。」と。富子さんは「お金のためよ。あなたも仕事ばかりしていないで、お金持ちの男と結婚すればいいじゃない。帰ってよ。」と言って、私にコップなを投げたのです。私はテーブルの下にあった氷こおりの入った袋ふくろをとって、富子さんをなぐりました。そしたら、富子さんはたおれて、テーブルに頭をぶつけて、動かなくなりました。